

高校生の社会的スキルおよび自尊感情の状況と 思いやり行動の関連

—課程別（看護科，普通科）比較—

炭谷靖子¹⁾，笹野京子²⁾，成瀬優知¹⁾

1) 富山医科薬科大学医学部看護学科

2) 新潟県立看護大学

要 旨

看護において対人関係を円滑に運ぶための技能である社会的スキルは重要である。そこで本研究では看護科高校生の社会的スキルの獲得状況を明らかにすることを目的とした。更にそれが看護に有用なスキルであるかを確認するために向社会的行動と自尊感情について併せて調査した。

対象は看護科115名と普通科121名であった。

課程別での学年比較において社会的スキルの獲得状況の違いはなかった。しかし、課程別比較において2つの下位概念（初歩的スキルと高度のスキル）で看護科生徒に高い傾向がみられた。また、自尊感情は3年生の課程別比較で看護科生徒に高い傾向があった。向社会的行動では、総合得点および下位概念の社会関係で看護科生徒が有意に高い得点を得た。なお、共分散分析の結果、高校生の向社会的行動には課程、初歩的スキル、攻撃に代わるスキル、計画のスキルが関連しており、学校関係での向社会的行動にはその他に自尊感情が負の関連を示していた。

以上のことから学年による社会的スキルの獲得状況の違いは認められなかったが、看護科を選択する生徒の特性として社会的スキルが高く、向社会的行動と関連していることが示唆された。

キーワード

看護科生徒，社会的スキル，自尊感情，向社会的行動，思いやり行動

序

社会的スキルは対人関係を円滑に運ぶための技能である^{1,2)}。そして看護科生徒においてこの社会的スキルの獲得が、普通科生徒に比べて高いと経験的に言われている。それは校外(病院)実習が多く、友人関係や教師・生徒関係以外の社会人としての態度を要求されることなどからも予測できる。

また、永田ら³⁾は看護学生が将来看護師になるためには、看護教育の中で公的な社会化の過程を経て、看護師に要求される、看護の役割を遂行し

なければならないと述べている。そして、この看護の役割を遂行するために、対人関係を円滑に運ぶための技能である社会的スキルは、重要な役割を果たすと言える。

しかし、看護科生徒の社会的スキルの状況が高いということは聞かれるが、これは経験的に述べられているものであり、調査に基づく報告はない。そこで、本研究においては、看護科生徒の社会的スキルの獲得状況について明らかにすることを目的とした。

また、獲得している社会的スキルが、単に形式

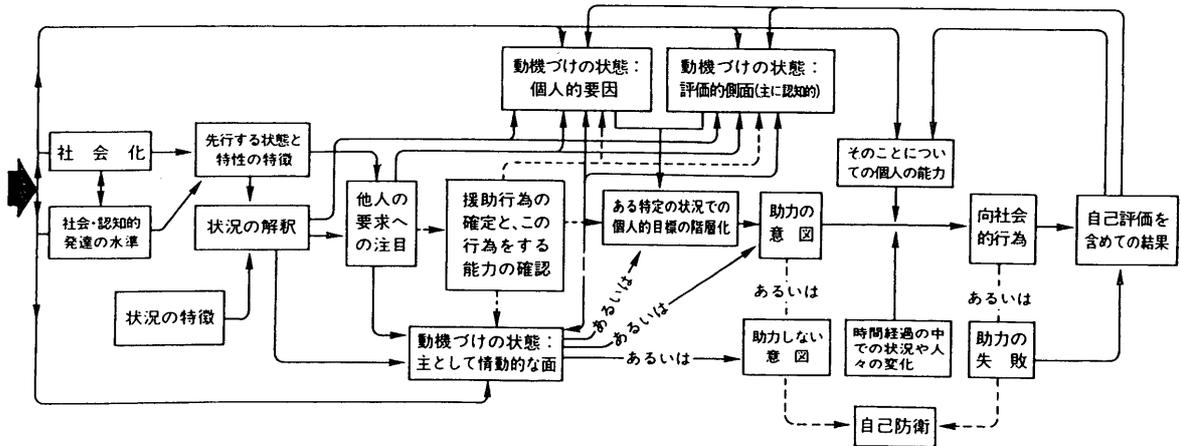


図1 アイゼンバーグ⁴⁾による向社会的行動のモデル

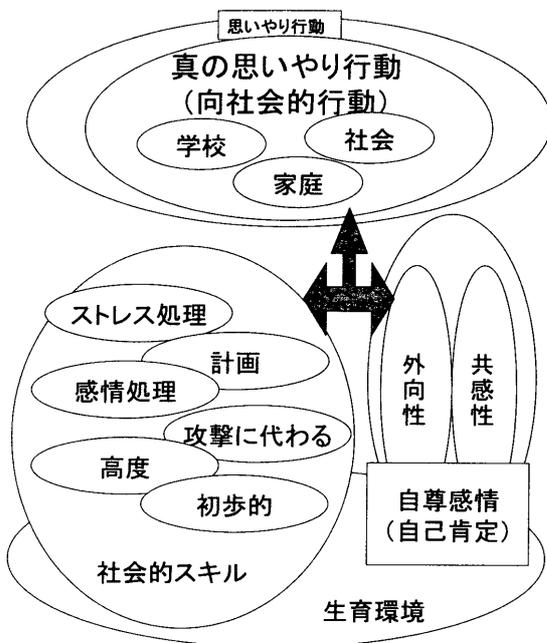


図2 概念図

的なものではなく共感性を伴い、看護に有用なものであることを確認するために併せて向社会的行動と自尊感情との関連についても明らかにすることを目的とした。

概念枠組みと用語の定義

1. 概念枠組み

思いやりを育てるためには共感性と外向性を伴う社会的スキルの獲得が重要であると考え、

アイゼンバーグ⁴⁾は思いやり行動と言われる向

社会的行動の前提として性格特性、援助に必要な能力、スキルが必要であるとしている。また向社会的行動のモデル(図1)を示している。本研究ではこのモデルと先行研究^{1,2,4)}を基に概念図を作成し基本とした(図2)。つまり、今回対象とした高校生の段階は社会的スキルを獲得していく過程である。その社会的スキルの獲得が看護教育の中で効果的になされ、対人サービスである看護に有用なものとして共感性、外向性を伴った人格的成長と相互に関連しながら真の思いやり行動に結びつくと考えた。また、自尊感情は人格発達、しつけ等と関係が深く、人間の行動を規定する要因であり、共感性、外向性獲得の基礎となると考えた。

2. 用語の操作的定義

以下に本研究に用いた用語についての操作的定義を示す。

- a. 社会的スキル：対人関係を円滑に運ぶための技術
- b. 向社会的行動(思いやり行動)：他人のためになるようなことをしようとする自発的な行為
- c. 自尊感情：自己に対する肯定的あるいは否定的態度

研究方法

1. 調査対象

A県B高校の生徒で協力の得られた看護科の115

名と同高校普通科の121名。

有効回答は、看護科生徒105名（1年生34名・2年生35名・3年生36名；91.3%）、普通科生徒111名（1年生36名・2年生39名・3年生36名；91.7%）であった。

対象の年齢は16～18歳である。なお、対象は女性のみとした。

2. 調査時期

平成9年7月（期末試験終了時）

3. 調査の概要

生徒の意識調査として調査の趣旨を説明した文書を添付し、無記名の質問紙による調査を実施した。（1学期の期末試験終了時に、担任教員により配布し、他機関からの依頼のものであり個人の評価等には関係しないことを説明したのち実施、回収した。）

4. 調査内容

1) 社会的スキル尺度

菊池²⁾による KiSS18 (Kikuchi's Social Skill

尺度・18項目版) を使用した。これは Goldstein, Sprafkin, Gershaw & Klein (1986年) の作成した社会的スキル尺度を菊池が縮約・日本語訳したものである。6つの下位概念（初歩的なスキル、高度なスキル、感情処理のスキル、攻撃に変わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキル）からなる。各下位概念は3項目からなり計18項目から構成されている。回答は5件法（1. いつもそうでない 2. たいていそうでない 3. どちらともいえない 4. たいていそうだ 5. いつもそうだ）により求め、得点は最高得点90から最低得点18の範囲内になる（表1）。なお、本研究においてこの尺度の信頼係数 α は0.865であった。

2) 自尊感情

Rosenberg, M. のSE (Self-esteem) 尺度に基づき、菅⁵⁾ がリッカート法による採点に改変したものを使用した。回答は4件法（そう・ややそう・ややちがう・ちがう）で求め、得点は最高得点40から最低得点10の範囲内になる。項目の中に、5つの逆転項目がある（表2）。なお、本研究でのこの尺度の信頼係数 α は0.759

表1 KiSS18 (Kikuchi's Social Skill 尺度・18項目版)

質 問 項 目	カテゴリー
1 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。	初歩的スキル
2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	高度のスキル
3 他人を助けることを、上手にやれますか。	攻撃に代わるスキル
4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	感情処理のスキル
5 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	初歩的スキル
6 まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	攻撃に代わるスキル
7 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	感情処理のスキル
8 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	攻撃に代わるスキル
9 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。	計画のスキル
10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	高度のスキル
11 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	ストレスを処理するスキル
12 仕事の上で、どこに問題があるかすぐにつけることができますか。	計画のスキル
13 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	感情処理のスキル
14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	ストレスを処理するスキル
15 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	初歩的スキル
16 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	高度のスキル
17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。	ストレスを処理するスキル
18 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。	計画のスキル

Goldstein, Sarafkin, Gershaw, & Klein (1986年) の作成した社会的スキル尺度を菊池²⁾ が縮約・日本語訳したもの

表2 自尊感情尺度

質 問 項 目
1 私はすべての点で自分に満足している。
2 私はときどき自分がまるでだめだと思う。
3 私は自分にはいくつか見どころがあると思っている。
4 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。
5 私にはあまり得意に思うことがない。
6 私は時々、たしかに自分が役立たずだと感じる。
7 私は少なくとも、自分が他人と同じレベルに立つだけの価値のある人間だと思う。
8 もう少し自分を尊敬できたならばと思う。
9 いつでも自分を失敗者だと思いがちだ。
10 私は自分に対して前向きな態度をとっている。

Rosenberg, M. の S E (Self-esteem) 尺度に基づき、菅⁹⁾がリッカート法による採点に改変したものを使用 2,5,6,8,9 は逆転項目

表3 向社会的行動尺度

質 問 項 目	領域
1 家族のものがぐあいの悪いとき、看病した。	B 家庭
2 友人がけがをしたり、病気の時、手当をした。	A 学校
3 コーヒーやお茶を入れて家族をいたわった。	B 家庭
4 友人の荷物をもってやったり、傘に入れてやった。	A 学校
5 家族のお祝いの日や誕生日などにプレゼントをした。	B 家庭
6 家族のために部屋を暖かくした。	B 家庭
7 歳末助け合いに協力した。	C 社会
8 まわりの人に元気に挨拶をしたり、話しかけたりした。	A 学校
9 苦しい立場にある友達を親身になって助けた。	A 学校
10 家族のためにお風呂をわかしてやった。	B 家庭
11 インドやアフリカを助ける募金に協力した。	C 社会
12 母親の手伝いをした。	B 家庭
13 兄弟(姉妹)が困っているとき、手をかしてやった。	B 家庭
14 友達の悩みを聞いてやったり相談相手になった。	A 学校
15 休んだ友達にノートを貸した。	A 学校
16 友達に勉強を教えてやった。	A 学校
17 バザーや廃品回収に協力した。	C 社会
18 家の掃除や片付けをした。	B 家庭
19 他人の失敗を笑ったりしないで励ましてやった。	A 学校
20 ゲームやスポーツのルールを教えてやった。	A 学校

横塚¹⁰⁾(1986年)によるP-B-H (Prosocial behavior in high school students) 尺度 (20項目)

であった。

3) 向社会的行動尺度

横塚⁹⁾によるP-B-H尺度(Prosocial behavior in high school students) (20項目)を使用した。これは中学生・高校生用に作成されたものである。回答は5件法(0. やったことがない, 1. 一度やった, 2. 数回やった, 3. しばしばやった, 4. もっとやった)により求め、得点は最高得点80から最低得点0の範囲内になる。尺度項目の内容構成はA学校, B家庭, C社会関係より成る(表3)。なお、本研究においてこの尺度の信頼係数 α は0.870であった。

5. 解析方法

看護科と普通科における学年間の尺度得点の比較および課程別尺度得点の比較には一元配置分散分析を行なった。

また、社会的スキルについての学年および課程の関連について共分散分析を行った。

社会的スキル得点と自尊感情得点の関連および向社会的行動と自尊感情得点の関連についてPearsonの相関係数を算出した。

更に向社会的行動と社会的スキル、課程、学年、自尊感情の関連を共分散分析により解析した。データ解析には、統計ソフトSPSSを使用した。

結 果

1. 社会的スキルについて

表4に教育課程別学年別社会的スキルの平均得点と標準偏差を示した。全体では、社会的スキルの総合得点の範囲は25~86点であり、平均得点は54.5±9.6、看護科55.3±9.2、普通科53.8±10.0であった。

課程別に各学年間の比較を行った結果いずれの比較においても有意な差は認められなかった。

看護科と普通科に分けた課程別比較では下位概念別に別に見ると初歩的スキルでは看護科9.6±2.5、普通科9.0±2.5、高度のスキルでは看護科10.0±2.1、普通科9.5±2.1、感情処理のスキルでは看護科9.2±1.9、普通科9.1±2.1、攻撃に代わるスキルでは看護科8.6(±2.0)、普通科8.6±2.2、

表4 社会的スキル(学年別・課程別平均値の比較)

学年	カテゴリー	合計		普通科		普通科		F
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	
全 体		n=216		n=105		n=111		
	初歩的スキル	9.3	2.5	9.6	2.5	9.0	2.5	3.49 ⁺
	高度のスキル	9.7	2.1	10.0	2.1	9.5	2.1	3.25 ⁺
	感情処理のスキル	9.1	2.0	9.2	1.9	9.1	2.1	0.16
	攻撃に代わるスキル	8.6	2.9	8.6	2.0	8.6	2.2	0.01
	ストレスを処理するスキル	9.0	1.9	9.0	1.9	8.9	1.9	0.27
	計画のスキル	8.9	2.2	8.9	2.3	8.9	2.1	0.01
社会的スキル(計)	54.5	9.6	55.3	9.2	53.8	10.0	1.28	
1 年		n=70		n=34		n=36		
	初歩的スキル	9.5	2.4	10.0	2.7	9.1	2.0	2.62
	高度のスキル	9.7	2.0	9.6	2.3	9.8	1.7	0.08
	感情処理のスキル	9.3	2.1	8.9	2.1	9.6	2.0	1.71
	攻撃に代わるスキル	8.9	2.2	9.0	2.4	8.8	2.0	0.23
	ストレスを処理するスキル	9.2	1.9	9.3	2.1	9.1	1.8	0.15
	計画のスキル	9.2	2.5	9.3	2.5	9.0	2.4	0.25
社会的スキル(計)	55.6	9.7	56.2	10.9	55.0	8.4	0.23	
2 年		n=74		n=35		n=39		
	初歩的スキル	8.9	2.5	9.3	2.1	8.6	2.8	1.59
	高度のスキル	9.8	2.1	10.3	2.0	9.4	2.2	4.14 [*]
	感情処理のスキル	9.0	2.0	9.2	1.9	8.9	2.2	0.34
	攻撃に代わるスキル	8.4	2.1	8.5	2.0	8.4	2.1	0.04
	ストレスを処理するスキル	8.9	2.0	9.0	2.1	8.8	2.0	0.14
	計画のスキル	9.1	1.9	9.2	1.8	9.0	2.0	0.16
社会的スキル(計)	54.2	10.0	55.5	9.1	53.0	10.7	1.10	
3 年		n=72		n=36		n=36		
	初歩的スキル	9.3	2.7	9.5	2.5	9.2	2.8	0.16
	高度のスキル	9.7	2.2	10.0	2.1	9.3	2.3	1.68
	感情処理のスキル	9.0	1.8	9.3	1.7	8.7	2.0	2.44
	攻撃に代わるスキル	8.5	2.1	8.4	1.6	8.6	2.4	0.26
	ストレスを処理するスキル	8.9	1.9	8.9	1.7	8.8	2.1	0.02
	計画のスキル	8.5	2.2	8.3	2.5	8.8	2.0	0.89
社会的スキル(計)	53.9	9.3	54.3	7.7	53.4	10.7	0.16	

学年間での比較では有意差なし +:p<0.1 *:p<0.05(看護科と普通科の比較結果)

ストレスを処理するスキルでは看護科9.0±1.9, 普通科8.9±2.1, 計画のスキルでは看護科8.9±2.3, 普通科8.9±2.1であった。総合得点および各下位概念での課程別比較ではいずれも有意な差はみられなかった。しかし、初歩的スキルや高度のスキルにおいては看護科生徒の得点が高い傾向がみられた(初歩的スキル:p<0.1, 高度のスキル:p<0.1)。

1年生では、総合得点および各下位概念での比較においていずれも両群に有意な差はみられなかった。

2年生では、高度のスキルにおいてのみ看護科

10.3±2.0, 普通科9.4±2.2で看護科生徒の方が有意に高い平均得点を示した(p<0.05)。

3年生では、総合得点および各下位概念のいずれも両群に有意な差はみられなかった。

また課程と学年の相互の関連を調整し、社会的スキルの獲得に対する課程と学年の関連を確認するため共分散分析を行った。共分散分析では社会的スキルおよび6つの下位概念をそれぞれ目的変数とし、課程および学年を固定変数としたが、その結果で有意な係数はなかった(表5)。しかし、初歩的スキルにおいて普通科-0.63(p<0.1)と高

表 5 社会的スキルを従属変数とした共分散分析結果

	社会的スキル (計)	初歩的 スキル	高度の スキル	感動処理の スキル	攻撃に代わる スキル	ストレスを処理 するスキル	計画の スキル
普通科	-1.49	-0.63 ⁺	-0.52 ⁺	-0.11	-0.03	-0.14	0.01
看護科	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
1 年	1.70	0.19	0.03	0.27	0.36	0.31	0.67 ⁺
2 年	0.38	-0.40	0.17	0.03	-0.11	0.02	0.61 ⁺
3 年	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

n=216

⁺:p<0.1

表 6 自尊感情 (学年別・課程別平均値の比較)

学年	合計		普通科		普通科		F
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
全 体	n=216		n=105		n=111		1.51
	22.1	4.5	22.5	4.8	21.8	4.3	
1 年	n=70		n=34		n=36		0.34
	21.7	4.8	22.1	5.6	21.4	3.8	
2 年	n=74		n=35		n=39		0.18
	22.4	4.2	22.1	4.6	22.6	4.0	
3 年	n=72		n=36		n=36		3.63 ⁺
	22.3	4.7	23.3	4.0	21.2	5.1	

学年間での比較では有意差なし ⁺:p<0.1 (看護科と普通科の比較結果)

表 7 自尊感情得点と社会的スキル得点の Pearson の相関係数

	社 会 的 ス キ ル						
	合 計	初歩的	高 度	感情処理	攻撃に代わる	ストレスを 処理する	計 画
自尊感情	0.47**	0.28**	0.36**	0.37**	0.40**	0.36**	0.35**

n=216

**p<0.01

度のスキルにおいて普通科-0.52 (p<0.1), 計画のスキルにおいて1年0.67 (p<0.1), 2年0.80 (p<0.1)であった。

2. 自尊感情について

表 6 に自尊感情の学年別・課程別の平均得点と標準偏差を示した。全体の自尊感情得点は10~40の範囲を示し、平均22.1±4.5, 看護科の平均22.5±4.8, 普通科21.8±4.3であった。学年間の比較、課程間の比較すべてにおいて有意差はみられなかった。

しかし、3年生での課程別比較において看護科23.3±4.0, 普通科21.2±5.1であり看護科生徒の得点に高い傾向がみられた (p<0.1)。

また、自尊感情得点と社会的スキル得点との Pearson の相関係数 (表 7) は社会的スキルの合計得点および6つの下位概念において0.35~0.47でありすべて有意であった (p<0.01)。

3. 向社会的行動について

表 8 に向社会的行動の学年別・課程別の平均得点と標準偏差を示した。

課程別に行った学年間の比較すべてにおいて有意な差はなかった。

課程別比較において総合得点の平均は看護科51.1±11.2, 普通科47.5±12.2であり看護科の平均得点が有意に高い値であった (p<0.05)。下位概念での課程別の比較では社会関係で看護科9.5

表8 社会的行動 (学年別・課程別平均値の比較)

学年	カテゴリー	合計		普通科		普通科		F
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	
		n=216		n=105		n=111		
全 体	A: 学校関係	19.3	5.3	20.0	4.8	18.6	5.6	3.65*
	B: 家庭関係	21.0	5.8	21.5	5.6	20.5	6.0	1.60
	C: 社会関係	8.9	3.1	9.5	3.1	8.3	3.1	8.15**
	向社会的行動計	49.2	11.8	51.1	11.2	47.5	12.2	4.98*
		n=70		n=34		n=36		
1 年	A: 学校関係	19.8	5.0	20.7	5.6	18.9	4.3	2.24
	B: 家庭関係	20.7	5.6	21.5	5.2	20.0	5.8	1.33
	C: 社会関係	9.3	3.3	10.1	3.0	8.5	3.4	4.31*
	向社会的行動計	49.8	10.7	52.3	11.4	47.4	9.7	3.79
		n=74		n=35		n=39		
2 年	A: 学校関係	19.3	5.6	19.9	5.1	18.7	6.0	0.84
	B: 家庭関係	22.4	5.6	23.6	4.7	21.4	6.2	3.10 ⁺
	C: 社会関係	9.2	3.3	9.7	3.5	8.6	3.1	2.68
	向社会的行動計	50.9	12.7	53.3	11.1	48.7	13.7	2.45
		n=72		n=36		n=36		
3 年	A: 学校関係	18.9	5.1	19.4	3.3	18.3	6.5	0.88
	B: 家庭関係	19.8	6.1	19.5	6.2	20.1	6.1	0.21
	C: 社会関係	8.3	2.8	8.8	2.8	7.9	2.7	2.28
	向社会的行動計	47.0	11.8	47.8	10.6	46.3	13.0	0.27

学年間での比較では有意差なし +:p<0.1 *:p<0.05 **:p<0.01 (看護科と普通科の比較結果)

表9 自尊感情得点と向社会的行動得点の Pearson の相関係数

	向社会的行動			
	合計	学校関係	家庭関係	社会関係
自尊感情	0.22*	0.18**	0.19**	0.19**

+:p<0.05 **:p<0.01

±3.1, 普通科8.3±3.1で看護科生徒が有意に高い得点であった (P<0.01). また学校関係において看護科20.0±4.8, 普通科18.6±5.6で看護科生徒が高い傾向であった (p<0.1).

学年ごとに課程別の比較を行った結果, 1年生では下位概念の社会関係で看護科10.1±3.0, 普通科8.5±3.4であり看護科生徒が有意に高い得点であった (p<0.05).

2年生では家庭関係において看護科23.6±4.7, 普通科21.4±6.2で看護科生徒が高い傾向であった (p<0.1).

3年生では, 全ての項目で両群に有意な差はなかった.

また向社会的行動得点と自尊感情得点の Pearson

の相関係数 (表9) は向社会的行動の合計得点で0.22 (p<0.05) および3つの下位概念において0.18~0.19でありすべて有意であった (p<0.01).

更に課程, 学年, 社会的スキル, 自尊感情の状況を調整しそれぞれの向社会的行動との関連の強さをみるため, 向社会的行動得点を従属変数とし, 課程, 学年を固定因子, 社会的スキルと自尊感情得点を共変量として共分散分析を行った. また, 学校関係, 家庭関係, 社会関係別の向社会的行動についてもそれぞれを従属変数として同様に共分散分析をおこなった.

向社会的行動の合計得点を従属変数とした共分散分析 (表10) では, 有意な係数として看護科に対して普通科-2.65 (p<0.05), 3年生に対して2年生が3.57 (p<0.05), 社会的スキルの合計得点0.78 (p<0.001) が得られた.

また学校関係では社会的スキル0.35 (p<0.001), 自尊感情-0.15 (p<0.05) であり, 家庭関係では3年生に対して2年生2.57 (p<0.001), 社会的スキルの合計得点0.27 (p<0.001) であり, 社会関係では看護科に対して普通科-1.02 (p<0.05), 社会的

表10 向社会的行動を従属変数とした共分散分析結果(1)
(社会的スキルの合計得点を用いた分析)

	向社会的行動 (計)	向社会的行動 (学校関係)	向社会的行動 (家庭関係)	向社会的行動 (社会関係)
普通科	-2.65*	-0.96	-0.68	-1.02**
看護科	0.00	0.00	0.00	0.00
1年	1.35	0.22	0.46	0.67
2年	3.75*	0.38	2.57***	0.80
3年	0.00	0.00	0.00	0.00
社会的スキル(計)	0.78***	0.35	0.27***	0.15***
自尊感情	-0.23	-0.15	-0.05	-0.03

n=216
*: p < 0.05 ** : p < 0.01 ***: p < 0.001

表11 向社会的行動を従属変数とした共分散分析結果(2)
(社会的スキルの合計得点を用いた分析)

	向社会的行動 (計)	向社会的行動 (学校関係)	向社会的行動 (家庭関係)	向社会的行動 (社会関係)
普通科	-3.16*	-1.08	-1.07	-1.02**
看護科	0.00	0.00	0.00	0.00
1年	0.96	0.09	0.23	0.64
2年	4.10**	0.56	2.55***	0.99
3年	0.00	0.00	0.00	0.00
初歩的スキル	0.91**	0.53***	0.01	0.37***
高度のスキル	-0.21	-0.03	-0.09	-0.09
感情処理のスキル	0.44	0.25	0.25	-0.05
攻撃に代わるスキル	1.94***	0.64***	0.96***	0.34*
ストレス処理のスキル	0.62	0.35	0.11	0.15
計画のスキル	0.80*	0.34*	0.36	0.10
自尊感情	-0.23	-0.15*	-0.06	-0.02

n=216
*: p < 0.05 ** : p < 0.01 ***: p < 0.001

スキルの合計得点0.15 (p<0.001)であった。

更に社会的スキルの6つの下位概念(初歩的スキル, 高度のスキル, 感情処理のスキル, 攻撃に代わるスキル, ストレスを処理するスキル, 計画のスキル), を共変量とした共分散分析(表11)での有意な係数は, 看護科に対して普通科-3.16 (p<0.05), 3年生に対して2年生4.10 (p<0.01), 初歩的スキル0.91 (p<0.01), 攻撃に代わるスキル1.94 (p<0.001), 計画のスキル0.80 (p<0.05)であった。

学校関係における向社会的行動を従属変数とした分析では初歩的スキル0.53 (p<0.001), 攻撃に代わるスキル0.64 (p<0.001), 計画のスキル0.34 (p<0.05), 自尊感情-0.15 (p<0.05)であった。

家庭関係における向社会的行動を従属変数とし

た分析では3年生に対して2年生が2.55 (p<0.001), 攻撃に代わるスキル0.96 (p<0.001)であった。

社会関係における向社会的行動を従属変数とした分析では看護科に対して普通科-1.02 (p<0.01), 3年生に対して2年生0.99 (p<0.05), 初歩的スキル0.37 (p<0.001), 攻撃に代わるスキル0.34 (p<0.05)であった。

考 察

1. 社会的スキルの獲得状況について

本調査において高校生の社会的スキルの獲得状況は, 課程間による明らかな差や, 学年進行による社会的スキルの変化はみられなかった。しかし, 初歩的スキルと, 高度のスキルという2つの下位

概念において看護科生徒が普通科生徒に比べ統計的に有意ではないが高い傾向がみられ、共分散分析でも同様の結果であった。つまり初歩的スキルと高度のスキルにおいて課程の違いによる明らかな差はないが関連の可能性は考えられた。

これらのことより今回の調査においては対象数の問題もあるが、学年による社会的スキルの獲得状況に明確な違いはなく、看護教育の経過の中で社会的スキルを身につけていくというよりもむしろ対人サービスである看護を志すものとしての特性が対人関係のスキルと関係している可能性が高いと考えられた。

なお、調査した看護科高校の実習は、1年生が5月に1日の見学実習、2年生は11月に1週間の実習、3年生は4月から10月まで実習の予定であった。本調査の時期は1学期の期末試験の終了時であり、校外での実習体験はまだ少なく、実習による効果が十分ではないと考えられる。経験的には校外実習後における生徒の対人関係スキルの変化は大きいといわれ、調査時期の選定に問題があったとも考えられる。

2. 社会的スキルと自尊感情の関連から

大坊⁷⁾の女子短大生に対する調査報告によれば社会的スキルで高い得点を示す短大生は自尊心が強く他人を意識することは少なく、対人不安も少ないとしている。今回の調査においても社会的スキル得点と自尊感情得点の相関係数は有意であり中程度の相関があると考えられた。

また、課程別自尊感情得点の比較では両群に有意差はみられなかった。しかし、3年生では、看護科生徒に自尊感情の高い傾向があった。看護科生徒は実習の中で看護の喜びや、やりがいを感じるにより自己の有用性を確認し自尊感情を高めていくことができると考える。今後の実習において生徒の自尊感情を高めるような教育的配慮の基で社会的スキルが向上する可能性を期待したい。

3. 向社会的行動について

今回、看護科高校生が獲得している社会的スキルが看護に有用なものであることを確認するために思いやり行動といわれる向社会的行動について

も同時に調査を行った。社会的スキルに共感性・外向性を伴うことで向社会的行動に結びつくと考えたからである。

1) 向社会的行動の学年別・課程別比較について

向社会的行動について学年間の比較において有意な差はなかった。しかし看護科と普通科の2群の比較において向社会的行動の総合得点および社会関係において看護科生徒の得点が有意に高かった。また学年別にみると学年が進むに従い課程別の差が認められなくなっている。この理由として1年生においては進路選択時点で、向社会的行動の多いものが看護科を選択している可能性が考えられる。そして永田ら⁸⁾の博愛に対する動機づけの学年進行に伴う低下の報告と同様に学年の進む中での向社会的行動の減少が考えられる。今後の課題として高校生という多感な時期における指導のあり方の検討が必要であろう。

2) 向社会的行動と社会的スキル、自尊感情、課程、学年の関係

共分散分析では場の違いに関わらず向社会的行動と社会的スキルに関係があると考えられた。これは菊池²⁾も社会的スキルにすぐれていると自分を考える人は他人に親切である傾向があると述べており、本研究の結果と一致する。しかし、先に述べた鈴木⁹⁾は、社会的スキルの上手下手のみでは向社会的行動に関与しないとしており、更に検討が必要である。

次に社会的スキルを6つの下位概念別に共変量として用いた共分散分析では、向社会的行動の合計得点において初歩的スキル、攻撃に代わるスキル、計画のスキルで関連があった。そして向社会的行動を学校関係、家庭関係、社会関係別にみた共分散分析では関係する項目に若干の違いがあった。

攻撃に代わるスキルは学校、家庭、社会関係すべての向社会的行動と関連があり、向社会的行動すべてと関わりと考えられた。この「攻撃に代わるスキル」としている項目は「他人を助けることを上手にやれますか」「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に

処理できますか」「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか」の3つの質問項目でありその内容は関係調整のスキルと言うこともできる。また、これらは困難や課題を乗り越えていく中で身につけていくスキルであり教育的配慮や見守りが重要であると考えられる。

初歩的スキルは学校と社会関係の向社会的行動と関連があり家族以外の外部と関わるためのスキルであると考えられる。

計画のスキルは学校関係で関連があり課題をこなしていく場としての学校の特性が現れていると考える。

また向社会的行動と自尊感情得点の関係について菊地²⁾は自尊感情が高い場合には援助行動に結びつきやすいとしている。これは自尊感情と向社会的行動の関係についての正の関係を示唆している。確かに、今回の調査でもPearsonの相関係数で自尊感情得点と向社会的行動得点の弱い相関がみられた。しかし課程、学年、社会的スキル、自尊感情の状況を調整した共分散分析では、学校関係においてのみむしろ有意な負の関係があった。学校という場の特性として校則や教師の指導といった管理的側面がある。よって学校関係においては従順に従う行動としての向社会的行動があることも考えられる。菊池¹⁾は、社会的スキルとは相手から肯定的な反応をもらうことができ、相手の否定的な反応を避けるスキルであるとも述べている。よって自尊感情を高めるための手段として学校関係での向社会的行動が行われている可能性もある。更に吉田ら¹⁰⁾の報告によれば一般的に日本人は他者からの承認・否認に対して敏感であり、他律的傾向が強く、自己卑下の呈示のほうが、性格的にも能力的にも高く評価される傾向があるとされている。つまり今回の調査においても外的評価に対する意識が自尊感情への回答に影響を与えた可能性がある。

その他、課程と向社会的行動との関連が認められ、特に社会関係で関連があり看護科の生徒は社会関係での向社会的行動が多いと考えられた。

社会的スキルの下位概念を共変量として用い

た共分散分析では家庭関係と社会関係においての向社会的行動において2年生であることとの関連が認められており、2年生が向社会的行動の多い学年であると考えられた。

しかし、本研究は横断的研究であり単に各クラスが特性が反映された可能性もある。今後、縦断的研究により教育の中での変化を確認していく必要がある。

結 語

看護科高校生105名に社会的スキルと共に自尊感情と、向社会的行動について調査し、普通科生徒111名のもものと比較した。その結果学年による社会的スキルの獲得状況に明らかな違いは認められなかったが、下位概念の「初歩的スキル」と「高度のスキル」において看護科生徒の方がやや高い傾向にあった。

自尊感情は3年生で看護科生徒が普通科生徒よりも高い傾向があり、向社会的行動では、総合得点および下位概念の社会関係で看護科生徒の方が有意に高い得点を得た。更に共分散分析の結果、今回調査した高校生の向社会的行動には課程、初歩的スキル、攻撃に代わるスキル、計画のスキルが関連していた。また、学校関係での向社会的行動にはその他に自尊感情が負の関連を示していた。以上のことから看護科を選択する生徒の特性として社会的スキルが高く、向社会的行動と関連していることが示唆された。

また、学校関係では自尊感情を高めるための手段として向社会的行動が行われている可能性が考えられた。

謝 辞

本研究にあたり、快くご協力いただいた高校の教職員および生徒の皆様、また研究をすすめるにあたり暖かくご指導いただいた本学基礎看護学講座教授高間静子先生に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 菊池章夫：思いやりを科学する，川島書店，東京，1994.
- 2) 菊池章夫，堀毛一也 編著：社会的スキルの心理学，川島書店，東京，1994.
- 3) 永田博 他：看護学生における対人関係価値の学年変化－縦断的研究法による内的妥当性の検討．看護研究 27(1)：41-47，1994.
- 4) N.アイゼンバーグ，P.マッセン：思いやり行動の発達心理，金子書房，東京，1993.
- 5) 菅佐和子：SE (Self-Esteem) について，看護研究 17(2)：117-122，1984.
- 6) 横塚怜子：青年期における向社会的行動の研究．福島大学教育学部研究科修士論文，pp 36-37，1986.
- 7) 大坊郁夫：外見的印象管理と社会的スキル，グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集，115-116，1991.
- 8) 永田博 他：看護学生における対人関係価値の学年変化－看護科生徒と普通科大学生による検討－．看護展望 17(12)：1420-1428，1992.
- 9) 鈴木隆子：向社会的行動に影響する諸要因－共感性・社会的スキル・外向性－，実験社会心理学研究. 32(1)：811-992.
- 10) 吉田寿夫，古城和敬，加来秀俊：児童の自己提示の発達に関する研究．教育心理学研究 30：120-127，1982.

The Relevancy of Social Skill, Self-esteem and Thoughtful Act of High School Students

-The Comparison Nursing and General Arts and Science Students-

Yasuko SUMITANI¹⁾, Kyoko SASANO²⁾, Yuchi NARUSE¹⁾

- 1) Department of Community and Gerontological Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University School of Nursing
- 2) Niigata College of Nursing

Abstract

Social skills, which handle relationships smoothly, are important for nursing procedures. The research purposes of study is to clarify the social skill levels of nursing students, and the relations between the social skills and thoughtful acts, which is also considered as prosocial behavior.

The data were obtained from 115 nursing and 121 general arts and science students. The result showed that the acquisition situation of the social skill could be recognized no difference among school years. But, nursing students had a little higher social skill under the questions about the basic and advance skill. Senior nursing students scored higher self-esteem points. Also, their scores about thoughtful acts were much higher than that of general arts and science students. As a result of analysis of covariance, the prosocial behavior related to academic program, basic social skill, alternative skill to offence and planning skills. Social skills for academic program related negative thought.

In conclusion, a prosocial behavior of nursing students was relatively high, and the social skill was correlated with prosocial behavior.

Key words

Nursing Students, Social Skill, Self-esteem, Prosocial Behavior, Thoughtful Action